

巻頭言

河井寛次郎と言う陶芸家に出会った。もちろん、昭和四十一年十一月十八日、七十六歳で死去しているので、本人に会った訳ではない。私が出会ったのは寛次郎の詩と言葉だ。「亡くなる年の秋、寛次郎の詠んだ詩「饗応不尽」は「無数のつかい棒で支えられている生命、時間の上を歩いている生命、自分に会いたい吾等、顧みればあらゆるものから欲待を受けている吾等、この世へお客様に招かれて来ている吾等、見つけられない程のもの、食べ切れないご馳走、このままだが往生できなかったら、寂光浄土なんか何処にあるだろう」で終わる。

高名な陶芸家でありながら、浜田庄司等と「民芸運動」にかかわり、自作に銘を入れなくなる。陶芸家として自作に銘を入れないと言う事の重さを考えた時、阿部先生のおっしゃった、読み人知らずの作品の精神と同じである事を痛感した。つまり、作者が大切なのではなく、作品そのものが芸術の命なのだ。更に寛次郎は、文化勲章を辞退、人間国宝、芸術院会員への推挙も辞退。無位無官の陶工として生涯を全うした。

寛次郎の言葉抄「新しい自分が見たいのだから仕事する」「おどろいて居る自分におどろいて居る自分」「此世は自分をさがしに来たところ此世は自分を見に来たところ」「饗応不尽」の詩と共に、そして寛次郎の生き方と共に私にはこれ等の言葉が深く深く心に沁みる。寛次郎の万分の一も才能が無く、寛次郎の万分の一も努力していないが、私はこの寛次郎の心と言葉を大切に生きようと思う。

(高崎)

太陽の舟 目次

三十一巻 三月号 (通巻二九二号)

わが愛する歌 一名歌鑑賞

庄司 久恵

巻頭言

高崎 邦彦

二十五首詠

月田 藤枝

阿部正路論 (第八十九回)

須藤 宏明

歌誌散見 (第六十五回)

豊泉 豪

作品 I

松本 昭子 他

一月批評 (作品 I)

原武 寿子

合 評 (座談会)

塚本 正子

選者十首

岩橋千代子・武田 節子

秀歌抜芳 (二八九号)

森本 元昭・上田やい子

作品 II

高崎 邦彦

作歌の目・作歌の技法 (第五十回)

佐伯 朋子 他

歌帖余白 (六十三)

三木 勝

文法講座 (三)

松岡 三夫

エッセイ 歌との出会い

奥田 清

会員サロン 歌会に出席して

石塚 立子

歌会・支部報告 他

豊島 英明

編集後記

山田 (紀)・角田・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

40 39 38 37 36 34 28 24 23 22 20 19 18 8 7 6 2 1

残り世を生く

月田藤枝

病む夫とひと日拘りおそき湯に老々介護を自らに問ふ
添ひて来し六十年は重たかり老夫支ふるによるける吾は
口数の少なき夫はさなきだに病む日々をなほ黙ふかくゐる
飲食のみ楽しみなりし伏す夫に好物を選び幾種を炊ぐ
伏す夫の寢息たしかめ来し夕方の街に急ぎて野菜を選ぶ
歩むこと叶はぬ夫と共にゐて支部歌会欠席も余儀なき想ひ
想ひ出せぬことに怯えてゐるとき夫は哀しき横顔をみす
昨日より今日なほ稚なくなりし夫共に生きゆくおもひをたたむ
立ち上がりわらわら歩みそめし夫に息子は家中に手摺をつける
受注ありし日は早朝より作業場に降りゆきし夫未だ若き日よ

己への勲章などなく黙々と精密作業にかけ来し夫は

老い夫の今日の恙をみ佛の姑に告げつつこみ上ぐるもの

デーサービスに此の頃慣れて行く夫の面に明るさ少し萌せり

歩行台のテスリしっかり握りしめ歩むけいこのまだ危ふかり

夫の失態詫びる吾に介護士の「みんなおなじですよ」と笑みて答ふる

ショートステイに夫をあづけて帰り路の空のまほらにしろき織月

〈吾と来て遊べや雀〉公園に老夫いざなひ冬の陽を浴ぶ

少しづつ己失ひゆく夫の哀しび鳩よつえばみてゆけ

父母の齡越えていくとせ今日夫は子等と米寿祝ひの卓に居並ぶ

翁面に似てやさしげな笑顔みせ子等より米寿の祝ひを受くる

祝はれて涙を拭ひる夫の今日の脳は冴えてゐるらし

大正九年十月二十八日と自の誕生日まさやかに言ふ

帰省せる娘に老夫たくして歌会に吾のひと日の癒されてゐる

吾がめぐりの温き言葉にはげまされ今日もおだやかに夫とのひと日

哀しみをうつろに耐ふる夫と手を携へて二人残り世を生く

阿部正路論（第八十九回）

阿部正路論

須藤 宏明

—浪漫主義文学の「〈個〉の尊厳」—

阿部正路は浪漫主義、とりわけ、戦後の浪漫主義をどのよう
に捉えていたのか。阿部は、「戦後浪漫主義文学の原理」
という論文で、戦後の悪しき民主主義を取り上げ、

つねに、多数こそが正しいという論理の中にも、ロマン
主義は存在しない。〈個〉の尊厳の中にこそロマン主義は
存在し、〈群〉の論理を隠れ蓑とする多数派の中には真の
意味のロマン主義は存在しない。『戦後文学論』桜楓社
昭和四十九年八月十五日。14頁）

と、戦後の浪漫主義文学の特質を指摘している。ここに記さ
れているように、阿部は浪漫主義の根源を〈個〉に置いてい
る。これは、阿部が宗匠的絶対権力を有する結社の長を否定
し、同人誌的結社をもって、結社組織の理想としている事実
と一致する。この意味において、「太陽の舟」という結社が、
真実、同人誌的結社として機能すれば、太陽の舟短歌会は浪
漫主義文学の運動体となる。

阿部は勤務する國學院大學に、浪漫主義文学研究会を発足
させた。この研究会は、研究のみを主体とした組織ではな

く、「〈個〉の尊厳」を重視した教育を根底におく、文学運動
体であることを目指した会である。まさに教育と研究が両輪
となった組織である。阿部の捉える浪漫主義文学の具体化が、
学内においては学生を主体にした浪漫主義文学研究会として
活動し、広く学内外においては一般社会人を主体とした太陽
の舟短歌会として結実したのである。

阿部の捉える「〈個〉の尊厳」とは、平板な生ぬるい感性で
はない。それは、戦後、死者に対して甚だしく傲慢であった
生き残った者に向かい、阿部が、

未練がましく〈生〉に執着しつづける〈老いの精神〉に、
ロマン主義は無縁であり、死者を否定する精神の内部に
ロマン主義はけっして存在しない。

と、寸言していることからわかる。この文章では、一見、〈老い〉
を否定しているような印象があるが、そうではない。ここで
最も重要な用語は「未練がましく」である。生に執着し続け
ることは、人間の根底であり、崇高な本性である。その際、
真摯に向き合わねばならぬことは、生き続ける自己の「〈個〉
の尊厳」なのである。「〈個〉の尊厳」を重視するということ
は、自己と同じく他者の「〈個〉の尊厳」に向き合うことであ
る。自己という〈個〉にのみ拘るならば、それは「未練がまし
く」なる。阿部が、浪漫主義文学の原理の主軸としているの
は、自己と他者を平等に、同価値に並べて「〈個〉の尊厳」を
見る視点なのである。自己への未練を捨て去った時、初めて
同人誌的という組織が可能となる。ひいては、「〈個〉の尊厳」
を重視した生の執着、〈老い〉が明るいものとなるのである。

歌誌散見 第六十五回

豊泉 豪

「ひのくに」①

「ひのくに」は一九二二（大正一一）年七月、佐賀県の有田で創刊された月刊誌である。『戦後短歌結社史・増補改訂版』（九八年、短歌新聞社）の「ひのくに」の項（高瀬一誌執筆）には「略」当時の県内の短歌会を統一したかたちで誕生した。／主要メンバーは、中島哀浪・直塚淳・深川欧花・高尾朝花などである。特に創刊時の文学的主張やスローガンは残されていないが、日ならずして編集発行を単独で担当した中島哀浪の生涯が、ひたすら九州佐賀の地においていたずらに中央歌壇と関わりを持たなかったこと、および創刊まもなくの編集後記に『火の国』（当時の結社名）は野山の一本道である。土にまみれた手をしっかりと握り合って、歩いて行く親しみがうれし」と書かれていることから、〈地域に根ざす文学〉が背景である」とある。現在「ひのくに」では中島哀浪を創始者として、哀浪が前田夕暮の「詩歌」同人であったことから、師系として、哀浪と夕暮の名をあげている。師系を持つ結社誌でありながら、同時に地域誌としての性格も強く持っているところにこの歌誌の特徴がある。

一九六六年に哀浪が没した後は、中原勇夫、代居三郎、中山陽右と受け継がれ、現在は山野吾郎が代表を務める。二〇〇九

年一月号が通巻八八五号となっている。

会員には維持同人と同人がある。維持同人の作品欄が巻頭に置かれ、同人作品は特選作品欄と、一般の作品欄に分けられる。ただし、毎年一月号はすべての作者が五〇音順で並べられる。毎月の出詠は各人九首であり、そのうち六首が掲載される。〇九年一月号の出詠者八三人のうち、約半数を佐賀県在住者が占める。ほか、福岡県と長崎県を合わせて四割強、残りが東京などの他地方在住者となる。なお、代表の山野は東京に在住している。前号の作品仄評と十首選、前々号の作品評に多くのページを割いていることも、この歌誌の特徴の一つと言えるだろう。ごく一部の同人だけでなく、多くのメンバーの参加によって運営されていることも誌面から窺うことができる。さらに特筆すべきは、〇四年四月号から、小中学生による作品欄〈若葉集〉が設けられていることである。同号の編集後記によれば、編集委員らが直接学校まわりをして始めたところ。このようなことが可能であるのも、「ひのくに」がまさに地域に根ざしているからであろう。当初より参加者数や掲載歌数は減少しているようだが、毎号続けられていることが貴い。近号より、小学一年生の歌をあげる。

- ・ なつやすみ八十さつもほんよめたうるさいママのおかげです
よね 周船寺小（福岡市）一年 東 桜綺
- ・ まっしろやうすいピンクのコスモスもゆらゆらゆれてうたっているね

話しかけるようなのびのびとした口語が心地よい。

同 右

一月批評（作品Ⅰ）

原武 寿子

・人生の仕上げを生きむ覚悟もて見る嶺岡の稜線燃ゆる

高崎 邦彦

還暦をむかえられた作者が感慨を込めての歌。「稜線燃ゆる」に、さらに充実した人生をと、若々しい前向きな意気込みがうかがえて感動いたしました。

・紅葉の華やぐ蔵王のなだりには樹氷と化するトドマツの黙

宮島 マツエ

華やかな秋色の山とは対象に極寒の中で樹氷となる針葉樹に思いを寄せての歌。冬のきびしさを目前にしているトドマツの木を「黙」と言い切って身の締まる思いです。

・雷の刃を受けた森の杉真っ直ぐに裂け立ち尽くしおり

村田 一江

落雷で電気の走った跡は身震いがするほどに恐いものです。しかも真っ直ぐに裂けているのですから。杉も作者も言葉なく立ち竦んでいる様子が怖怖と伝わって来ます。

・ふる里のかかはり遠のく墓所移転無縁よりましと心割り切る

吉岡悠紀子

つい、最近私も同じような決心をしたところですが、この歌を拝見してさらに安堵いたしました。ふる里は遠いですが、跡を継ぐ者の近くで見守ることが出来れば何よりと信じます。

・どんぐりの夕日に光る坂の道わが前を行く長き影法師

相羽 照代

坂道に落ちているどんぐりと作者を夕日が映している様子が愉しく想像できました。坂道なので人影を長く映すということ、細かく観察されていると思いました。

・再婚の妻への愛を仕上げたし駅まで傘持ち出迎え頼む

生稲 進

再び新しくご夫婦となられた作者の奥様への愛情ある表現に感動いたしました。甘えることも心づかいのひとつです。御主人様に頼られていると感じられた奥様は、きっと、幸福感に満たされたことでしょう。愛とともに末長いお幸せをお祈りいたします。

・天窓より入り来る風は古障子煽りて脅すひとり居の夜

岩橋千代子

風の強い夜だったのでしょうか。淋しいと思う前に大層ドキッとされた作者の胸の内が身にしみます。昼夜を問わず社会福祉等にご尽力の作者に尊敬の念を抱きます。

・声もなく微笑みだけで一日過ぎ妻と吾との夕餉に向かふ

遠藤 剛

何ごともなく一日が無事に終って只、ほほ笑むだけ。何と素晴らしいご夫婦でしょうか。「声もなく」とは恙なくおだやかであってこそ。あたたか味の溢れる歌です。

一月批評（作品Ⅱ）

塚本 正子

・渡らねば向かうに着けぬつり橋に竦むわが背を風の押し来ぬ

近藤 リイ

塔のへつりのつり橋でしょうか。足の竦むのに風に押されて、勇気を出して渡られた。名勝の塔のへつり、初めての私も目を睨り、裏の後でつり橋を一步も渡れませんでした。大内宿他七首に会津の風情がよく出て居りました。

・たたなはる鬩りし山の夕空燃ゆ希望萌し来若き日のこと

佐伯 朋子

重なりあって連なる鬩り行く山の夕空が燃える様に赤い。若い日の様に希望が芽生えて来るようだ。吉事の少ない新年を明るく、希望が持てると励まされます。

・庭覆ふ胡桃を伐りしこの夏は空蟬あまた干草に宿る

塩田 秋子

毛虫を避けようと大樹（くるみ）を伐られた。庭が明るく広くなった事でしょう。大樹がなくなり空蟬が草に宿る飛び去った蟬はどこかで鳴いている。夜まで鳴いていた去年を思い出す。長年聞いていた蟬の鳴くのを聞けない淋しさがよくわかります。

・亭々たる境内覆ふ大公孫樹母亡きあとも年輪増して

志賀 倭子

大銀杏樹の高くまっすぐにそびえたち境内を覆う、母が亡き後も年輪を増して行くことだろう。人間の寿命より長き樹

木。人間のはかなさを思います。飯泉観音参詣の七首に母上への愛と信心の篤さを感じます。御手本にしたい。

・ケープルに揺られ見下ろす六甲山の紅葉ほの見ゆ蹴出しのごとく

武田 節子

六甲山の紅葉ほの見ゆがよい。全体でなく紅葉が目立つ場所の一部を裾除けの様だと歌う。七首の最後の歌「アングル・トムの小屋より一五六年の時流れ黒人の大統領生るる今しも」にも魅せられた。

・単線の電車が二輛友の庭横切りてゆく歌会の最中

鶴来けい子

歌会を楽しんでいる庭を電車が横切って通る。のどかな風景が面白く羨ましい。江之島電鉄でしょうか、春に出掛けて見たくなりました。

・吾が瘡を^と除らむと決めし眞夏より亡夫がみてるし亡夫が護りるし

富永 道子

御主人が亡くなって、悲しみが消えぬ時の瘡宣告、さぞつらかった事と思います。何時でもどんな時でも貴方を見守って下さいますとも。年末には、元氣な貴方に接し安堵致しました。「ぬし」を「ぬむ」にしたら如何でしょう。

・小庭辺の枝垂るる梅に陽ざしうけびんくの花の一人かがよふ

永谷 茂

風情ある枝垂れ梅が陽ざしを受けて花がびんくにかがよいひとときわ美しいと詠われている。何を見ても何時も御一緒だった奥様を思い出して居られる事と存じます。

合評

座談会

E 今月は新年号の中から四首を選んで合評をすすめたいと思います。先ず最初に、深谷幸子会員の

どんぐりの大樹の下で手にのせる実はころころと野の風を受く から始めます。如何でしょうか。

H 「どんぐりの大樹」という大きなものを上句にもってきて、下句でどんぐりの実を詠んで、大と小を対比させて上手い歌の作りと思いましたね。「野の風を受く」というふうに止めて、あたりの風景までも想像させます。

Q 私もそう思います。大きな木に向うと、人間は大きな気持ちになります。歌いぶりも大きいです。作者の髪も衣服も風に吹かれています。歌いぶりが目に浮かんできます。

W 作者の仕草まで見えてきて、遊んでいる気持もよく出ている。どんぐりと一緒になって、動いているのが感じられる。「ころころ」という擬態語はちょっと？

B 平凡だと思う。擬態語を使う時には、思い切った語句を使うべきです。「ころころ」をもっと手の中にある事を実感させる擬態語にし、「受く」をとってしまつて、むしろ、季節をいれたら良いと思う。例えば、「冬の野の風」としてみるとか。

H そうですね。下句は平凡。せっかく上句は上手くいっているのですから。新味を出すといいですね。

W 擬態語を使うなら、今日の歌会にあった木の実が「ぼんころり」といった斬新なのを。

B いづれにしても短歌は結句がとても重要なので、このことを忘れないようにしたいものです。

E では次は、土橋茂徳会員の

義歯で玩味 眼鏡で観照 耳遠きことしはチチロ野に出て 聴かな です。いかがでしょうか。どなたでも。

Q 私はこの中で一番好きな歌です。重みのある歌です。老いをそのまま受け入れて、日々の精神を豊かに、喜びと感謝の気持ちで歌によくでていると思いました。

H 作者の老いに向かう日常がよく出ていると思います。「玩味」と「観照」を辞典で調べてみましたら、難しい事が書いてありました。だから、作者は言葉をよく選んで歌に使っている。入れ歯だと、本当の味は分からないでしょうね。それでも作者は、老いを受け入れる覚悟を「玩味」と「観照」という言葉で表現している。そして、耳の遠い身でありながら、チチロの声を野に出て聴こうとしている。これは上手いなあ、と思いました。

W ちょっと、言い過ぎかなとも思う。僕だったら、義歯が玩味、とやります。

B どうして義歯が玩味できるのよ。義歯で噛んで、舌で味わうの。問題なのは、「耳遠き」です。終止形の「耳遠し」にする。なぜなら、今年、急に耳が遠くなったとは思えないから。それから、「聴かな」の「な」は希望をあらわす古い

助詞なので、むしろ意志をあらわす助動詞「む」を使い「聴かむ」とすると、今年こそは野に出てチチロを聴こう、という気持が強く出るのはないかと思う。

Q 老いを積極的に肯定し、前向きに歌おうとする作歌姿勢は良いと思います。

B そうですね。だからこそ「む」にしたい。

E それでは、三首目の江面伸子会員の

一合の米に粟入れくりごはんやっぱり家族が欲しいと思ふに移ります。いかがでしょうか。

W 「やっぱり」は表現がナマだと思っ

H 私は口語表現があっても良いと思う。生活を小さく切とって、優しく歌っているところが良いと思う。

Q 「一合の米」というので、今一人だというのがわかります。切実な感じがしましたね。

H そうですね。私は「やっぱり」に沢山のものが含まれていると思いますね。かつては、夫や子供達と食べた熱々の湯気のたつ栗ごはんを、今は一人で食べる・・・作者の寂しさが伝わってきます。

B 一合のご飯って美味しくないんだよね。上句の「粟入れくりごはん」は栗、くりと重なり、すこしゴタゴタしているので、「一合の米で炊きたる栗ごはん」になおす。そのほうがすっきりすると思う。それから、作者は旧かなを使っているの、「やっぱり」は「やつぱり」になおす。下句のほうは、「やつぱり家族が欲しいたそがれ」でどうでしょうか。「思ふ」

は使わないで。結句を「たそがれ」にすると、一人住まいの侘しさ、夕方の寂しさがよく出ると思う。

W やはり、結句が大事ということ。

E では、梶川喜與志会員の

立冬の世界を冷たく吹く風に身構えつつもチェンジに夢追うに移ります。如何でしょうか。

H アメリカの新大統領オバマのチェンジを上手く詠みこんだ時事詠だと思います。

W 時事詠は難しいですね。何年か後に、オバマのチェンジが残るかどうか。リンカーンの有名な言葉のように。

H あの「人民による、人民のための・・・」ですね。

Q 私は「身構え」が良いと思います。

B 「立冬の世界」と「不景気の世界」と「世界」を両方に掛けて使っていて、上手い作りです。

W 結句の「夢を追う」には、今の日本には夢が無いと言っているようにもとれる。「オバマ」を入れた方が良い。

Q・H 同感ですね。

B 「オバマ」を入れて、「立冬の世界を冷たく吹く風に身構えオバマのチェンジの眩し」ぐらいでどうでしょうか。そうすれば今の日本の政治家のなさけなさがよく表現できる。今回の四首とも、結句に注目しました。とにかく、結句は短歌にとって、大切なものである事を意識して、充分に考えて歌を作りたいものです。

E 本日はありがとうございました。

(記録・山田紀子)

選者十首 (1月号より)

選者 岩橋千代子

満ちてくる豊かな水の流れ込む器のわたし満ちるよろこ

び 三木 勝

軽快な音をたてつつ爪を切る余分なものは身から捨つべ

く 山田 紀子

メロディの美しさに酔ふ歌レッサン早口言葉のやうな原語

で 相羽 照代

掌に冬を集むるかの如く幼子は掌に落葉掬ひぬ

井上萬里子

移りゆく感情とらえ残しおく歌に託せしおのが想い

を 北川 昭

錦秋の山分け入りて瀬音きく中津溪谷夕陽に染まる

木村 重夫

失くしたる命のパズルはめこんできのうあすへと引き継い

で行く 狐塚 秀子

巻雲を掃きし秋風野に流れアキエノコロは穂を巻きゆれ

る 酒向 一次

わが影を落として夕陽沈みゆく今地の上に独りのごと

し 庄司 久恵

☆くると服が回って洗われる泥の思い出落ちるのかし

ら 豊島 英明

選者 武田 節子

ひとりとは常逢へば三人の宵の酒酌めばほのほの心はおほ

ろ 井上萬里子

☆十六夜の月光に淡き丘の街しわぶきひとつ静寂を裁て

り 君塚 一雄

峡ふかく激つ瀬音につつまれて切り立つ崖の紅葉に足ら

ふ 木村 重夫

まだ一度も払っていない年金の特別便来る漏れはないか

と 熊谷 香織

写経せる亡母の後姿顕らけしわがものとせり母の祈り

を 志賀 倭子

寒葵咲き初む庭の落葉掃く土の薫りの季節巡りし

鈴木 薫子

☆灯の下に栗の皮むく君と吾ただそれだけの時のいとし

き 玉川 愛子

☆くると服が回って洗われる泥の思い出落ちるのかし

ら 豊島 英明

ホテルのバー安しと宣ふわが総理いやはや庶民のレベルに

非ず 長須 正文

冷え切った午後の浜辺の繰り返す小さな波が光を返す

原田 寛

選者十首 (1月号より)

選者 森本 元昭

啄木の歌に魅せられ詠むとしつき長きに未だ誇れる歌なし
松木 昭子

仕込み終へ納戸で時待つ山ぶだう濃き紫がはやも息づく

山名 恒子

神がみのすみ給ひたる伊勢の地の陸のあをきを深く呼吸する
石塚 立子

この一生思い出つくりの一人旅過去断章の心のスケッチ

北川 昭

☆十六夜の月光に淡き丘の街しわぶきひとつ静寂を裁てり

君塚 一雄

孤独とは切り離された何ものかさびしかなしいそれさえ持

たず
狐塚 秀子

菊の香の匂う玄関友の歌集開けば秀歌津波のごとく

善波 一江

☆灯の下に栗の皮むく君と吾ただそれだけの時のいとしき

玉川 愛子

種落ちて又コスモスは咲きにけりわが小庭の小宇宙かな

二反田 實

まとまらぬ歌につまづき雨の中言葉さがしにまた庭に出づ

原武 寿子

選者 上田やい子

還暦に赤きは不用と新しき旅立ち一つ吾のキャンピングカー
高崎 邦彦

濯ぎもの干す竿の先露ふむむ月の雫と紛ふ朝明け

福地 啓子

わが記憶授かりしころの母の日記はじめて読みぬ裳裾ゆるめて
松本 啓子

ふる里のかかわり遠のく墓所移転無縁よりましと心割り切る

吉岡悠紀子

薄曇る土曜の午後の気怠くてどきりと赤き落葉踏みたり

井上萬里子

再生紙の臨時任用希望願切り取り線をサクサクはさむ

熊谷 香織

始まったメタボリックの検診も昭和の繁栄かたる体形

鈴木 薫子

☆灯の下に栗の皮むく君と吾ただそれだけの時のいとしき

玉川 愛子

眼前に広がる海は青くして快晴無風たつぷりと昼

辻本わか子

赤い羽根呼びかけている少女等の声が背中におぶさつてく

中村 武光

東北に嫁ぎし娘上京し暖かいねと先づ口に出し

三澤誠之助

結句の「先づ口に出し」が万感の想いを込めて、歌全体を引き締めている。娘が遠方に嫁ぐという事は寂しい。私の母は、息子に対して鷹揚であったが娘は遂に能登から出す事は無かった。母の判断の根拠は娘が嫁ぎ、孫が出来、母が老いて行った時に分かった。それは母のエゴかもしれないが、肉親が近くで助け合う日本古来の生き方、女が家を守る生き方に根差していた。拔芳歌、そんな時代から遠くなった親子の何気無い心の交流だから胸を打つ。私も今の時代を生きる一人だから。儲けより損することを知りつつも株に手を出す庶民悲しく

森本 元昭

日貿出版社の小沢社長に「甘い話に乗るな」と教えられた。「人は楽しんで金は儲からない」とも教えられた。私はその教えを守って生きて来た。退職した時に銀行から投資を勧められた。他人に金を託して唯待っているだけで金を儲ける生き方は私には出来ない。全て断った。その直後世界同時恐慌が起きた。小金を持つ庶民には小さなリスクも大きい。分かっていても手が出るやるせなさ。拝金社会は個人だけの責任とは言えない所が悲しい。

芭蕉像、句碑を拜して登りつつ見上ぐ石段に八十路引

きしむる

諸 幸子

諸さんの信仰心は筋金入りだ。今回の山寺は七年前の再訪と言う。前回は水無月、雨の為登る事を断念。今年は奥の院に心を残して下山。心を残す事は再々訪に繋がる。山寺はやさしく諸さんを待つ事だろう。拔芳歌、山寺は山門から奥の院まで、千五段の階段があると言う。山門から姥堂そしてせみ塚、更に根本中堂へ。八十路の作者が臆を決して階段の上を見上げ登って行く。その決意が結句「引きしむる」と終止形でなく連体形で止めた事で見事に表現し得た。

軽快な音をたてつつ爪を切る余分なものは身から捨つべく
山田 紀子

爪を切るパチンパチンと言う音が軽快さを感じさせ、その軽快さは余分なものを身から捨てて行く思いに繋がって行く。私達は生きて行く中でいつの間にか余分なものが増えて行く。それは物であったり、人であったり。そしてそれはなかなか捨てられない。そんな作者の想いが、爪を切る行為の表現で描き得て見事。私の場合、爪を切る音は歯で爪を切れなくなった体力の衰への悲しさとなって響く。人の感情とは面白い。

人影も途絶えて久しふるさとの山寂しかり谷淋しかり

吉田 幸雄

前々号 (289号) 秀歌抜芳

「寂」はジャク、音がなくひっそりとしている様。「淋」はリン、水が絶えずしたたる様、さびしいは日本での用法。日本人の感性が作らせた言葉。作者はその二文字をうまく使って、過疎の村の情景をうまく表現した。山は音なく、谷は水の音、そこには人の気配が無い。それはふるさとへの哀惜。私のふるさととは、海も村も変わってしまった。変わらざる寂しさと、変わってしまった寂しさどどちらの喪失感が大きいのであろうか。

年を経て國學院の師を偲び教えを受けし日々を愛しむ

岡崎 くに

岡崎さんは長く太陽の舟短歌会の同人であったが、阿部先生の御逝去の際退会していた。しかし此度復帰し又私達の仲間になった。真実うれしく思う。師とは当然阿部先生。大学のオープンカレッジで教えを受けた。岡崎さんは二月十五日又新しい年を加え、昭和・平成を生きて来た。再び師の教えの文学の世界に戻ってきた喜びはいかばかりか。先生の亡くなった後、柏の蕎麦屋で別れてからの年月を私も思い出した。

この一生思い出づくりの一人旅過去断章の心のスケッチ

北川 昭

人の一生は継続であって、決して断絶はありえない。しかし、思い出は断片であって、断片の集積が人生と言えるのではなからうか。作者はそんな

な人生の真実と真正面から向き合い、その過去の断章を大切に積み上げ自らの人生の意味を問いつけようとしている。母が居、義母が居、妻が居、子供等が居、友が居て、しかし全ては自らが選抜した生。一人の旅なのだ。作者の心を支える信念の強靱さに敬服する。

枯草の中より一本首を出すまむし草の赤き血の色

木村百合子

「俱利伽羅峠を行く」七首の内一首。俱利伽羅峠の木曾軍と平家軍の戦いは、平家軍十万人の大半を失うと言う源平の戦いでは希有のもの。牛の角に松明は疑わしいが、ほとんどの兵は断崖から落ちて死んだと言われる。そこにはどれ程の悲しみが凝縮されている事か。作者はその古戦場跡に立って、枯葉の中から、真赤なまむし草の実の塊を見た時に、それを血の色と見た。歌人の観察力と感性の確かさを感じる。

暖かな秋の日和にたわわなる紅き林檎の山道楽し

工藤 和子

作者は旅人ではない。実際ここで生活している。だから歌に地に足の着いた確かさがある。その場所所は弘前、岩木山が見える林檎畑の山道。私もそんな道を通して岩木山に登った事がある。手を伸ばせば木に生っている林檎が取れる。そんな山道。

冬を間近の暖かな秋日和。秀麗な岩木山。たわわに稔った真紅な林檎。まるで夢の様な世界。まぎれも無い作者の生きる場所、だから結句の「樂し」が生きる。しかしこれが厳しい冬への序章である事も又知らねばならぬ。

秋空にひびく収穫の音たえて狭田に残る稲架杭の見ゆ

工藤 誠子

かつてほとんどの田には万年杭の稲架が立っていて、晩秋の農村の風物詩だった。稲を刈り稲架にかけて干し、脱穀。そして人氣の絶えた寒々とした田に籾殻を焼く煙と稲架杭が冬を待っていた。私は農家の生れでは無かったが、そんな風景が好きだった。しかし今は根こそぎ器械が刈り取り、田には細かく切られた茎が散らばっている。それでも機械の入らないような狭田に稲架杭が残っている。作者の心にも響いた。

十三の回忌重ねし妻憶ふ子に頼ずりし最後の論し

小貫 昭

妻が逝って十三回目の忌日が巡って来た。記憶は決して風化しない。否、風化出来ない記憶。それは死ぬまで作者が持ち続けなければならぬ。つくづく、夫も妻も一緒には死ねないが、出来るだけ一緒に生きる事が大切だと思う。子に頼ずりをして「父さんを大事にしてね」と言ったのであ

ろう。事実しか歌っていないが、作者の心情は痛い程伝わり、涙が出て来る。歌の力はすごいと思う。封建の垢に染めらるこの前の大和の心よ還りてしがな

佐田 孝義

「てしがな」は積極的に自己の願望を示す終詞。「大和心が現代の世に還ってほしいものだ」の意。それは決しておざなりではない。作者の強い想いの表れ。「封建の前」とはいつ頃の事を言うのか、私にも判然としない。しかし、少なくとも、自然と人間が一体となって生きた時代、万物に靈を感じ、言靈を信じ、日本民族が自立し同一性を確立した時代を言うのではあるまいか。精神的希求を受け止めたい。

木枯しがサーカス運ぶ十日市浪江の町よ童にかえる

鈴木美智子

作者の故郷であろうか。私にもとても懐かしい名前。まだトラックの運転手をしていた頃、同じ運転手仲間浪江町出身者がおり、工場にアルバイトで浪江町の中学生在が来ていた。十一月二十二（二十四日の祭りの事を歌ったものではないかと思う。上句の「木枯しがサーカス運ぶ」がうまい。昔はサーカスは祭りの花形だった。だからいつでも祭りの時のサーカスは自分を童心に戻してくれる。そんな世界が今も生きて存在する作者を真実

前々号 (289号) 秀歌抜芳

うらやましいと思う。

ぬ 喘息になやまされつつ秋は逝く吾が人生も後期に入り
善波 一江

「秋は逝く」の字の使い方に言い知れぬ悲しさと怒りを見た。それは「後期」があるから。後期高齢者医療制度を聞くまでは「後期」が人生の区切りを表わす言葉になろうとは思ひもしなかった。喘息に医療費もかかるだろう。国が定めた人生の区割りに、秋も逝きもう冬になったと表現したことで、国の押し付けに対する静かな怒りが伝わる。時事詠として秀逸。

お茶お華歌に親しむ人生を送りし妹に言ふ事のなし

永谷 茂

「妹」とは故京子さん。お二人は見るも羨む仲の良い御夫婦であった。どれ程言っても、どれ程詠っても最愛の妻を失った悲しみは消える事があるまい。だからこそ、結句の「言ふ事のなし」が尚更に悲しく響く。新年号の年頭所感に奥田先生の「炉端」の「あとがき」の中から元気を頂いたとあった。妻に先立たれ気概を失っていた作者に同年齢の奥田先生が「喜寿こそ青春なれ」と語る。その言葉に勇気付けられたと言う。歌の仲間とは真実素晴らしい。それはお互いに言葉で感じ合える仲間だからだ。

細長き顔にも似たり十三夜母のやさしき首かしげたる

二反田 實

十五夜(旧暦八月十五日)の月見をしたら必ず十三夜の月見(旧暦九月十三日)をするものとされる。十五夜だけでは片見月と言って嫌われていた。八月十五夜の月見は中国からの伝来だが、九月十三夜の月見は日本だけの風習。当然作者はその事を知っていたの十三夜。その月は、今、今と見つけていたい月。なぜならそれは母のやさしい首をかしげた顔に似た月。母の深い慈悲の心を愛する作者にとって十三夜は深く重い月の夜なのであった。

愚痴の数少なくなった気がつけば歩幅が少し小さくなった

原田 寛

難解な歌の多い作者の歌の中で抜芳歌は理解しやすい歌と言えよう。人は誰でも心の中に沢山の愚痴を秘めている。それが日常生活の中で自己消化されているかどうかで、生き方が大きく変わって行く。愚痴や不満をいくら溜めても人生は豊かにならない。作者の身近に居て、その苦しみを見て来ただけに私にとってもううれしい事だ。下の句の冷静な自己分析がいかに作者らしい。大股で歩く肩肘張った姿ではない。ゆったりとした小幅の歩み。歩みも心である事を知る。

作歌の目・作歌の技法(第五十四)

哲学をする短歌(二)

三木 勝

前回「短歌は哲学をする。」として、短歌と哲学の接点について述べたが、今回も哲学と短歌の関係について、考察してみよう。今回は、哲学の内側から哲学と短歌の関係を見るのではなくて、哲学・論理・自明性の外側も含めて、考察してみよう。

世界は、どのようにして成立しているかは、世界をどのような方法によって解釈するかによって違ってくる。世界の物質的事実の構造とその関係のありようは、人間の解釈のいかんに関らず、独立的に存在しているのであるが、世界を認識する主体として人間が存在している限りは、人間は人間にとつて可能な方法で世界を認識することしか出来ない。人間の持つ肉体的・思考方法的制約の外から世界を見ることは人間には出来ないのである。

人間の思考には、西洋哲学を基礎とする論理的方法がある。この方法が今日の学問・学術のほぼ百パーセント近くをカバーしている。この方法は、自明から次の自明の道を見つけ、自明から自明へと辿ることを論理的として、結論を導き出すのである。自明から始まり、自明と自明の道を辿り、結論へ至り、そこで完結し、論の終焉とする。この方法は、初めがあり、途中経過があり、完結・終焉があるので構造的である。構造的であるということは、初めがあり、終わりがあ

るので、全体的であるということである。この方法では、論を構想するということは、前もつてその論の全体構造を予測するということである。全体構造を予測する方法として仮説という方法を用いるのである。この方法においては、全体が先であり、あとから部分が詳細化され、部分が姿を現して行くのである。小説を書くにあたって、全体を構想してから書き起こされるのである。これは小説が、全体から部分へという西洋の伝統的な思考のもとに生まれたものの産物だからである。

翻つて、わが国の『徒然草』を省みてみるに、そこには書き始めから構想がなく、目指すべき結論の仮説もない。兼好は、心の移り行くままに心に映ることを書き留めて行くのである。その時その時の集積が、ひとつの世界・全体を生み出していく。つまり『徒然草』という作品の世界を形成していく。だが、そこには『徒然草』の執筆とその思考を通して得られた結論の提示はない。兼好が、仏の起源を父に問うた幼き日の思い出を最後として『徒然草』を擲筆したということは、そこで、あるいはそこに至るまでに何かを得心したからであろう。しかしこの得心は、西洋の論理つまり私たちが今日普通に使うところの結論の形態を採っていないので、得心が存在することすら読み取ることが困難なほどである。しかしこの時点で兼好は「万事は皆非なり。言ふにたらず。願ふにたらず。」という『徒然草』二八段の世界を乗り越えていたのである。「万事は皆非なり。言ふにたらず。願ふにたらず。」の世界にとどまり、そこから抜け出ることが論理的にも心理

的にも出来ないとしたなら、兼好は先に書き進むこともできず、摺筆後、歌人としての世界に戻ることも出来なかったであろう。

兼好は、『歌論書』『近來風体抄』を著している二条為世門下の「和歌四天王」の一人であった。「和歌四天王」とは、淨弁、兼好、頼阿、運慶であった。その中でも頼阿は、歌論書『井蛙抄』や『愚問賢注』を著した。しかし兼好は、歌論書を書くことなく『徒然草』の執筆に向かった。何が彼をしてそうせしめたのであろうか。確かなことは、彼は当代一流の歌人であったこと、その彼が歌論書の執筆に取り組むことなく、『徒然草』に取り組んだこと。そしてそれから『徒然草』摺筆後も歌人としての生活を続けたことである。歌人兼好はなぜ歌でなく、歌論書でなく、随筆形式で思考し表現しなくてはならなかったのであろうか。そこには当然のことながら、歌や歌論書では探れない世界を探索しようとして、散文形式である随筆という方法を選ったのであろう。この事によって兼好は再び歌人に戻ることができた。

その随筆の形式は完結体としてその全体を見渡してみるとそれは歌集と同じ形式となる。どのように同じかという点、瞬間瞬間の閃きとその集積によって積み重ねられた部分の集合が結果的に全体を形成しているという事である。歌集も同様に年代順形式であれ、部立形式であれ、生の瞬間瞬間に生み出された作品が部分を形成し、その部分の集積が、全体を結果的に形成していく。歌集には初めがあり、中間があり、終焉がある。歌集の終焉となる地点・部分には、終焉となる

ことの必然性はなく終焉の時は、たまたま・偶然でしかない。西洋哲学の論理の証明の完結としての結論のように、結論であるが故にこれ以上の先がないという、必然に伴う終焉ではないのである。「必然に伴う終焉ではない」終焉を持つ世界には、初めから構想はありえず、構造の予見もない。構造が人間の意識によって意識的に造られることもない。しかし、『徒然草』形式の随筆や歌集が終焉した時、その終焉の地点から過ぎ越し方を振り返る時、そこにはひとつの世界とそその世界の構造が形成されているのである。しかしその構造は、結論を持たない終焉によって閉じられているので、次の世界を展開しようと思えば、そのことを可能とする終焉なのである。つまり随筆や歌集には結論が無い故に常に次の世界に繋がっていきける状態にある。全体とは完結させるものの存在によって成立する。完結のないものには全体はない。このことから随筆や歌集が常に部分であり、次の部分に繋がる存在であるということが言える。随筆や歌集は、それ全体がそれよりも更に大きい部分の、あるいはある全体の部分なのである。

西洋哲学の論理の世界でしか世界を把握し、解釈できないとしたならば、今日まで日本の世界が形成されてきたことは、ありえないことにある。なぜなら人間は世界を把握し解釈することなしには世界も社会も動かせないからである。故に今日まで日本の世界・社会が形成されてきたという事は、結論も全体も持たない、部分の連続として世界を把握し解釈をする手法が、西洋哲学の論理の手法と並んで現実世界に効力を持ってきた証といえる事になる。

歌帖余白（六十三） — 編集雜記 —

松岡三夫

おい木村さん信さん寄ってお出でよ、お寄りといつたら寄っても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く気だらう、押しかけて行つて引ずつて来るからさう思ひな、・・・

樋口一葉の『にぎり絵』はこのように始まり『たけくらべ』は次のように始まります。

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お歯ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらなひて、

大音寺前と名は佛くさけれど・・・

正岡子規が、一行読めば一行に驚き一回を読めば一回に驚きぬ・・・西鶴を読んで估屈に失せず平易なる語を以つてこの緊密の文を為すもの未だその比を見ず、一葉何者ぞ、と絶賛した樋口一葉の文章です。

樋口一葉は明治五年三月二十五日に東京に生れます。本名は奈津。中島歌子に歌、古典を学び、半井桃水に小説を学びます。生活に苦しみながら『たけくらべ』『十三夜』『にぎりえ』といった秀作を発表、文壇から絶賛されます。僅か一年半でこれらの作品を世に送ったが、二十五歳で肺結核により死去。『一葉日記』も評価が高い。

小説家「樋口一葉」とくらべ、歌人「夏子」（本名）としての印象は薄い。しかしながら、膨大な日記から見ても、彼女の二十五年足らずの人生の大半は、和歌との格闘で占められていたことがわかります。小説執筆はこれに重なるわずかな五年ほどの期間に過ぎない。

明治二十五年の二十歳のとき、一葉はいままで自分の歌に否定的・懐疑的になるのです。

やうやう我心に世の中の哀れということを思ひしままに、月にも花にも惑ふかく成りて、心のうちのまぶしがたきふしふしをかたはしもらすことにこそ、真

の情はこもり侍れ

と、歌論に見せかけながら、ここに現われているのは樋口一葉自身です。誰にも祝福されず、自らも認めるわけにはいかない小説の師半井桃水への恋心は、彼女は女として深め、ものみなに感じやすくさせていたのです。

はかなきにおもひゆるして白露の哀れ玉よと君みしかば桃水への「真の情」が籠もるがゆえに、一葉はこれらの歌を歌会に公表することはできなかったのです。伝統的な題詠主義を守っていた萩の舎でも、受けいれらるはずはなかったのです。鳳（与謝野）晶子が『乱れ髪』を世に問うたのはこれから七年のちのことでした。しかし、結局歌が一葉を放すことはなかったのです。

あしたづのねぶれるみれば冬ながらさをしかのおき別れたるあとならん

とにかくに越えてをままし空蟬の世渡る橋や夢の浮橋
鋤き返す人こそなかれ敷島の歌の荒す田荒れに荒れしを

文語で短歌を詠む人のために (111)

奥田 清

(イ) 作品Ⅰ・Ⅱにみられる助詞・助動詞の問題点

地下道にダンボールの家増えて^①きしこの住人ら談笑してをり

後期高齢を手話で語れば人生の終りなりと^②し聞くは切なし

にぎやかに行々子^③が鳴く葦のやぶ声のみ響き姿は見えず
否といふ言葉やんはり言ひ^④ぬま怒れる思ひに夕べとなり^⑤ぬ

さくら桜ひと日見て^⑥きし夜半に^⑦さえ臉上に重く花びらの降る

外人と生徒で賑う金閣寺拝する人なくカメラ^⑧が並ぶ

子馬生れゆらゆら立て^⑨り一呼吸おきて大地に一歩を出せり^⑩

茶の間^⑪より交配品種大輪のゆりのさそひの匂ひに目覚む
そばの花可憐に咲き^⑫し片隅で小さな花卉風に透き^⑬し

一幅の絵^⑭を眺むごと目^⑮を細め桜に目白の飛び交ふ^⑯を見ゆ^⑰

平家螢の小さき^⑱が宵闇切りてとぶ捕え難かり少女のわれに

毎日を何しているか問は^⑲れば知りたきことに奔走すと

言ふ

傍線部①「きし」は、カ変連用形に過去の助動詞「き」の連体形の接続した形で、文法的に問題はないが、「き」は自己経験の過去を表わすとするならば、家を作ったのは、他人だから、「増えにけり」などと表現もできる。傍線②「し」は、サ変の動詞ともとれるが、強意の副助詞とみた方がおもしろい。傍線③「が」主格の助詞。ことさら主格を明示しないで、略してもよいのではないか。傍線④⑤ともに完了の助動詞「ぬ」であるが、④は他の表現があってもよい。傍線⑥「きし」は傍線①と同じ形だが、カ変から過去の「き」に接続するもう一つの形、未然形接続の「こし」にしたら語調はどうか。⑨「さえ」は、文語では、「さへ」と表記する副助詞で、共通的な「すら」「だに」でも表現できそうだ。「さへ」の必然性を考えたい。傍線⑧「が」主格の「が」明示がよく効いている。傍線⑨「り」⑩「り」は完了の助動詞であるが、他の完了「ぬ・たり」等では表現できない存続の意があり、的確な表現である。傍線⑪「より」起点を示す用法で、「ゆりの花」の存在位置を明確にする。傍線⑫⑬「し」はともに過去の助動詞であるが、⑬の「透きし」は、除いて「透く」と切るか。他の助動詞の「ぬ」「けり」などにかえられないか。傍線⑭⑮⑯「を」すべて目的格の助詞、一首のなかに三度も使うのはどうか。⑱「が」体言の代用をする助詞。的確な表現かどうか。⑲「問はれば」は口語表現であり、文語でどう表現しようか。

歌との出会い

石塚 立子

この度、『太陽の舟』（二月号）に、歌集『風待ちて翼は』の書評をお寄せ頂きありがとうございます。拙い歌集に対し、暖かく身に余るお言葉を頂き、お礼の言葉が見つからない程です。歌集を上梓しました後、これから先をどの様に詠えばよいのか、自分の心の中に空洞が出来、すっかり空白になった感じがして、詠う心がどこかに消えてしまった虚脱状態に陥りましたが、書評の言葉がトンネルの向こうにはの揺れる春の明かりの様に思え、歌への想いが甦って参りました。本当にありがとうございます。

さて、歌を詠む時、私は、その時々々の心のあり処に深く感じる部分を表現したいと思います。それは、自分が大上段に構える程の文学論を持ち合わせている訳ではないし、有名歌人の歌に精通する事もないままに、短歌という垣塙に突き落とされ、足掻き、今日までの十数年を過ごしてきました。私の精一杯の立つ位置なのかと思うからです。

そんな私の、子供の頃の記憶の一つに与謝野晶子の歌がおぼろげに残っています。その一首。

*ああ皐月仏蘭西の野は火の色す君も雛罌粟我も雛罌粟

『夏より秋へ』 大正三年

あまり、意味のわからないままにきらきらと美しいその世

界に惹かれ、ルビのコクリコが何かを暗示するように思われ、子供心に仏蘭西に憧れ、雛罌粟に憧れました。でも、その様な歌が自分の子供心にあった事すら長い歲月のうち、どこかに忘れてしまっていました。それが、何十年か後、そのコクリコが突然目の前に、大群落のポピーとして出現しました。それは、スペインのなだらかな丘陵をマドリッドから、古都アランフエスに旅する時でした。咲き盛るひまわり畑、小麦の銀の波、そしてポピーの群落が至るところに咲き競う景色に、久しく忘れていた晶子を思い出し、コクリコに会えた喜びを思いました。それが、今から十数年前の、私が短歌を始めた頃の事です。指を折りながらの三十一文字の世界の入り口でした。

私は、このように旅をしている時、（ふと止まる時間の感覚）というものを感じます。クレオパトラも歩いたといわれる、トルコのエフェソス遺跡の大理石の道を歩くとき、奈良山辺の道を歩き、額田王や、影媛を思う時、その時代に自分がいて、同じ空気を吸っているような歴史の時空を越える感覚に囚われます。そんな瞬間が好きでその時の思いを言葉にしたいという思いにもかられ、もしかしたら、その時の言葉は、古の言葉と同じ霊力を持ち、言葉として、私の心に、逆に靡いてきてくれるのではとも思いつながら、歩き、光を浴び、風を感じ自然の中に身を置きます。そんな自然と一体になった感覚が歌になればと今は思います。

太陽の舟という乗り心地の良い舟に乗って良き師、良き先輩、良き友に恵まれた幸せを思うと同時に、これからは、飽くなき、短歌への挑戦者でもありたいと思います。

歌会に出席して

豊島 英明

去年のクリスマスから一月末日まで休暇を利用し、実家に帰省をした。この間、運良く「太陽の舟」の三木先生よりお誘いを受け三ヶ所（柏支部一月十六日、シーサイド短歌会一月二十五日、太田支部一月二十六日）の歌会に出席することができた。この場を借りて、今回自分が感じた事や思った事を述べさせて頂きたいと思う。

三ヶ所の歌会を通して感じられたのは平等性だった。初めてお会いする人もおられたが、年齢・性別を気にする事なく自然に迎えて頂いた。誰でも快く迎え入れてくれる雰囲気は共通して見られた。これは三木先生が「太陽の舟」（一月号 Vol.31, No.1, p.38）に「平等性こそが太陽の舟短歌会の宝であり、財産であり、礎であることを忘れてはならない。」と書かれている事が、短歌のみならず、人に対しても実際に体现されている事に驚き感心した。また三木先生は「作歌の目・作歌の技法」（第四十八回）で次のようにも述べている。「相互批評の存在は、太陽の舟短歌会が、生命力を持って、歌作を続ける集団となっていくためには、欠かすことの出来ない存在である。それゆえにこそ、批評のあり方が絶えず検証され、かつ会員それぞれが、他者の作品を適切に批評していける精神・力・視点を会員相互で涵養していかなくてはならない。そしてその具体的

な方策を、これから長く継続的に会として模索していかなくてはならない。」このように建設的に他者の歌を批評する力を含めて身につける事が課題だと感じた。現時点では、具体的にどうしたら建設的な批評の力を身につけられるのか分からないので、これから「太陽の舟」の先生方や会員の皆様からご指導を受け賜りたいと思っている。

課題という点で一つ気がついた事がある。それは会員の平均年齢が高いことだ。本年十二月号で歌誌「太陽の舟」は三〇〇号を迎え、その時までには同人・会員の数を二百名とする目標がある。その中で若い世代の占める割合を少しでも増やす事も大切であると感じた。なぜなら歌会を通して、世代間の交流をする事はお互いにとってプラスに働くと思うからだ。又、先輩方の知識を次の世代へ継承させる事は重要な事であると考える。歌を学ぶだけでなく、人生とは何であるか、様々な生き方を実際聞き学ぶ事は若い世代にとって貴重な経験になる。これは他の場所では体験しにくい事だ。同世代のつながりが多い若い世代にとって、歌会は縦の人間関係が持てる良い機会だと思う。その為、若年層の入会は今後の課題であると考える。

最後にもう少し、歌会の利点を挙げたい。それは他の歌会へ出席する事で、歌誌「太陽の舟」作者名と顔が一致する事だ。出席後はその人の歌や会話や顔が思い出され、毎月届く歌誌が更に楽しみになる。加えて、歌会に出る事で多くの人に出会い元気を頂ける。これは次なる作歌の原動力となる。皆様にも是非できるだけ多くの歌会へ出席して頂きたいと思う。

歌会報告

本部歌会 新年会 第348回 (久保田記)

日時 平成21年1月10日(土) 12時〜16時

場所 ホテルはあといん乃木坂(健保会館)

出席 40名 出詠 49首

会費 八千五百円

新年歌会は、昨年と同じく乃木坂のホテルで開催された。編集長はじめ何名かの会員の欠席は、止むを得ない事情でしたが、定刻通り心新たな気分で始められた。

先ず高崎代表の挨拶があり、昨年と違い日々が健康で幸せであることの喜び、昔から言う一病息災の意味についてもしみみ語られた。そして今年は太陽の舟の全員で、よい歌を沢山作ることを目標に、是非頑張ってほしいと結ばれた。

次に、三木企画広報部長の挨拶では、昨年は長歌特集を組んだり、夏の大会以外に秋の吟行会などがあったが、大変よい結果をもたらしたと言われた。そして今年の抱負などのべられた。なお遠方から参加下さった二反田同人の紹介や、志賀同人紹介の山本さまの初めての同席もあり、活気ある歌会に入った。

司会はベテランの原田事務局長で、採った人1名、採らなかった人1名が指名され、それぞれ発言しい後に高崎代表のまとめの指導で進められた。途中10分の休憩をとったのみで、本日の49首は無事に了る、緊張した楽しい歌会だった。

以下は互選による高点歌です。

・病む親を介護する友へ届けたく日がな一日昆布巻きを煮る

八代 陽子

・凍てつきし寒き路上に腰据えて夜明けの市に老婆待ちおり
宮島マツエ

・幾千の過去のひかりの響きあひ銀河は真夜を音なく流る
石塚 立子

・膝いざ行り来しひなたは遠しと泣く母にせめて送らむ春のくつ
下 富永 道子

・〈咳ぜんそく〉死の淵を見た生きてゐた今年の私は去年と
違ふ(特別奨励賞) 相羽 照代

歌会終了後、席を並べ替えて、役員会が開かれた。暫くし休憩後、懇親会の席となった。〈あかねさす〉〈明日香風〉〈たちね〉〈恋ひ恋ひて〉〈さわらび〉〈ひさかた〉〈むらさき〉と、日めくり万葉集の中から選ばれた歌を、テーブル名にして座席を決め、それぞれが着席した。

奥田先生の『炉端』と、石塚立子同人の『風待ちて翼は』の出版記念会も兼ねての懇親会が、原田事務局長の司会によりすすめられた。

始めに高崎代表からのお祝いの言葉があり、奥田先生代行の二反田同人に記念品が贈呈された。次に、石塚立子同人へも記念品が渡され、高崎代表、三木企画広報部長、原田事務局長の順にお祝いの言葉が述べられた。

また、川村月の船支部長のお祝いの言葉で、『風待ちて翼は』の歌集の中には、何と孫の文字が無かったことと、NHKの〈小さな旅〉にと採り上げられる程の文才もあり、頼もしい同人であることが述べられた。なお庄司太田支部長、末次柏支部長と続いた、観察力があり、今後第二、第三の歌集出版も楽しみですとそれぞれお祝いの言葉があった。



そして、石塚同人のお礼の挨拶があり、盛会のうちに出版記念会から、三木企画部長の進行により懇親会に移行されていった。

まず乾杯の音頭は、監査役の丸山孝一郎氏がとり、新年を祝し太陽の舟の前途を祝った。テーブル毎の賑やかな談笑が続き、晴ればれた新年の宴になった。

各々の支部の報告や今年の抱負など語られ、美声のご披露などですます華やき、乃木坂の新春の夜は更けた。閉会時刻も迫り、高揚した気分を大事にしながら、和やかにそれぞれ満たされる思いで帰路についた。

水戸支部 支部長／長須 正文 (塩田記)

日時 1月11日(日) 13時～16時

場所 びよんど(男女センター)

出席 8名 出詠 12首

司会 塩田 秋子

新年最初の集まり、長須先生のミニ講義は窪田章一郎。ヒューマニズムを基調とした抒情歌に定評がある。「まひる野」を創刊した歌人。続いての歌会は新人が一人入り明るいスタートとなった。素材は皆なかなか良いのだが表現を一貫させること、と初心に帰って納得。次は首尾一貫の例。

・花言葉かがり火花とふシクラメン並ぶ店先日ざし華やぐ

岩橋千代子

(塩田記)

水戸支部 支部長／長須 正文

日時 1月18日(日) 10時～12時

場所 岩間公民館

出席 4名 出詠 10首

司会 深谷 充代

新年それぞれの理由で出席が少なかった。岩間の里の自然と歴史に浸ったひと時でした。

・鳴き交す山鳩の声しきりなり裏の坂道下りゆく夕

込山 千代

秘めた心の動きが読みとれる

・年の瀬に季を違へし暖かさ一枚二枚と重ね着をぬぐ

鶴来けい子

具体的描写のすばらしさ

品川支部 支部長／久保田昭江

(須澤記)

日時 1月15日(木) 13時～16時

場所 旗の台シルバーセンター

出席 5名 出詠 7首

司会 須澤 漢子

支部歌会始め。宮井さん、月田さん欠席のため小人数となりましたが、今年も連帯感をもって楽しくゆくことを誓い合せて、一首づつ全員で丁寧に行いました。

この冬の最低気温を記録する寒い日でしたが、会場は暖かく、和やかなひとときを過ごしました。

・艶やかな黒豆飾る草石蚕ちよろぎの紅に小梅のかもす春のいろどり
久保田昭江

一首にある「草石蚕」について、作者から詳しい説明とこれにまつわる幼い頃の思い出話に一同耳を傾けました。

大田支部 支部長/庄司 久恵 (山名記)

日時 1月26日(月) 13時～16時30分

場所 山王高齢者福祉センター

司会 山名 恒子

出席 9名 出詠 9首

一首一首どこに問題があるか話し合い、三木先生が適切な指導をして下さり、昂揚した時間が過ぎました。佳作二首。
・生き継ぎて三万いく日数へつつ小さき気負ひ芽ばふ新年
川村 貴美

・身を緊めて凌ぐ夜に来る静寂は枯れ野にひとりの写真のごとし
庄司 久恵 (富永記)

柏支部 支部長/末次 房江

日時 1月16日(金) 12時～15時

場所 アミューゼ柏

出席 10名 出詠 21首

司会 富永 道子

留学中の英国から、クリスマス休暇帰国中の会員、豊島英明さんが出席下さり、大いに和やかな若やいだ歌会でした。その後の、茶話会も「一緒下さり、「ありがとうございました。勉強になりました」との元気な感想に、「こちらこそ。お元気でガンバッテね。」と全員でお別れしました。

・蕎麦お餅お節を食らい寝正月年明け顔がアンパンマンに
豊島 英明

・風つれて帰りしコートの肩につく名前の知らぬ黄色の葉っぱ
山田田鶴子

・憂ひ一つなだめて冬菜つむ畑にプリズムとなりうすら氷ひかる
末次 房江

洗足池畔吟行会のご案内

実施日 平成二十一年三月三十日(月) 十二時～四時半まで

場所 洗足風致協会会館会議室(二階) 一階はレストラン・テラスジュレ

東京都大田区南千束二一―一六

東急池上線洗足池駅より二分(駅前)の歩道橋を渡って降りた所) 洗足池駅はJR五反田駅より九分、JR蒲田駅より十三分

参加費 五〇〇円(当日受付)

申込締切 三月二十日

問合せ等 ☎03-3727-2150 山名 恒子

吟行会内容 十二時～一時 吟行 一時～四時三十分 全体会